

SGH4年次研究成果発表会記録

1 中学1年A組 国語科 授業案

1) 教材・単元

「魅力を伝えよう」

2) 日時

平成31年2月8日(金) 1限(10時～10時50分)

3) 場所

中学1年A組 教室

4) 対象生徒

中学1年A組(男子20名、女子20名、計40名)

5) 授業者

瀬古淳祐

6) 学習過程

要項冊子参照

7) 本時の学習活動

(1) 目標

- ・協同的探究学習を通して、自身の構成メモをよりよくできるよう考えを深めることができる。
- ・構成メモを再構成し、自分が書こうとする文章の考えをまとめ、見通しを持つことができる。

(2) 指導計画

- 1時間目 合唱祭自由曲の歌詞解釈。
- 2時間目 自由曲の魅力についてのマッピング。
- 3時間目 構成メモの作成(個人探究Ⅰ)、グループ交流(協同的探究)。
- 4時間目 (本時) 構成メモの全体交流(協同的探究)。構成メモの修正(個別探究Ⅱ)。
- 5時間目 自由曲の魅力を伝える文章を書く。
- 6時間目 意見文を読み合い、評価・交流する。

(3) 授業形態

協同的探究学習(全体交流→個別探究Ⅱ)により授業を進める。

本時の展開

	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価 (『育てたい力』の項目)
導入	3分	・本時の活動を知る。	・各班の代表の構成メモがまとめられたプリントに目を通す。	
展開1	16分	・各班の代表が、構成メモについて発表する。	・前時に話し合った構成メモの、魅力の観点や話の展開について発表する。	・自分の班で議論したことを、他の班にわかりやすく発表することができる。 (発表活動) 〈A、C、D〉
展開2	19分	・発表された構成メモの共通点や独自性を整理する。	・各班から発表された曲の魅力や話の展開について、共通点と独自性を整理する。	・共通点や独自性をまとめ、発表することができる。 (ワークシート) (授業中の発言) 〈A、C、D〉
展開3	10分	・自分の構成メモを再構成する。	・議論の内容を踏まえ、ワークシート下段に、構成メモを再構成する。	・議論を受けて、構成メモを再構成することができる。 (ワークシート) 〈A、C、D〉
まとめ	2分	・次時の内容を知る。	・次時に構成メモをもとに魅力を伝える文章を書くことを知る。	

2 中学2年B組 社会科 授業案

1) 教材・単元

「開国」を多角的に考えよう」

2) 日時

平成31年2月8日（金）1限（10：00～10：50）

3) 場所

高校3年A組 教室

4) 対象生徒

中学2年B組（男子19名、女子20名、計39名）

5) 授業者

尾方英美

6) 学習過程

日本の開国に関する資料を読み取り、既習内容と本時の内容を関連づけながら、日本が世界情勢の中でどのような動きをしていたか、その要因は何だったのかを考察する。

7) 本時の学習活動

(1) 目標

- ・ペリーの来航の理由を、世界の情勢をふまえ、理解する。
- ・日本の開国がどのように行われたかを知り、外国へ対する意識が、幕府の鎖国政策で抑圧されただけのものではなかったことを理解する。
- ・自分の考えを、根拠をもって相手に伝え、お互いの意見を尊重して話し合いを行い、開国について深く理解する。

(2) 指導計画

- 1 時間目 ゆらぐ幕府の支配
- 2 時間目 開国（本時）
- 3 時間目 開国の影響
- 4 時間目 江戸幕府の滅亡

(3) 授業形態

協同的探究学習法

本時の展開

	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価（『育てたい力』の項目）
導入	5分	復習	配布プリントの年表をまとめながら、日本と中国の出来事を比較する。	
展開①	5分	ペリー来航の説明	ペリー来航から開国までの展開について理解する。	
展開②	7分	＜個別探究①＞ 前回までの授業と史料をふまえて、アメリカの日本来航の意図を読み取る。	【発問①】 アメリカはなぜ日本にやってきたのか？史料と今までの授業をふまえて考えよう。 （史料）フィルモアの書簡 →個人で回答（2分） →指名で発表（1分）	・ 正確に史料を読み取ることができるか。 ・ 前時の授業内容と本時の内容を関連付けることができるか。 （A）（B）
展開③	30分	＜個別探究②＞ 史料からの読み取りをふまえて課題を考える。 ＜協同探究②＞ 5人グループに分かれ、意見を交換する。 ＜個別探究③＞ 他の人の意見をふまえて、自分の考えをまとめる。	【発問②】 なぜ日本は、戦争を起こすことなく開国することができたのか？史料と、日本・中国・アメリカの動きと関連性をふまえて考えよう。 （史料）開国論、海防論、オランダからの開国勧告、大名の意見書 →個人で回答（10分） →グループで共有（5分） →発表（10分）	・ 史料から必要な情報を探し、自分の考えをまとめることができるか。 ・ 導入の復習や個別探究①の内容と関連づけて考えることができるか。 ・ 自分の考えを分かりやすく伝えることができるか。 ・ 他の意見を聞いて、自分の考えを深めることができるか。 （A）（C）（D）
まとめ	2分	次回以降の授業の予告		

3 中学3年B組 英語科 授業案

- 1) 教材・単元
「英語で自分の考えをつたえよう」
- 2) 日時
平成31年2月8日(金) 1限(10:00～10:50)
- 3) 場所
第一総合教室
- 4) 対象生徒
中学3年B組(男子20名、女子20名、計40名)
- 5) 授業者
三小田博昭
- 6) 学習過程
要項冊子参照

7) 本時の学習活動**(1) 目標**

- 自分の考えを英語で伝えることができる
- 英語で発話された他者の考えを理解することができる
- 英語を使って協同で課題解決にあたることができる

(2) 指導計画

年間授業計画参照

(3) 授業形態

TAをファシリテータとしたグループ活動

本時の展開

	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価 (『育てたい力』の項目)
導入	10:00 (5分)	自己紹介	グループファシリテータ(TA)に対して自己紹介を行う。TAの自己紹介。	英語でのグループワークに向けて英語の頭をつくる。
展開	10:05 (10分)	グループタスクの説明	グループタスクの準備 キーワードの理解 グループタスク内容理解	これから行うグループタスクの内容を理解する。
	10:15 (25分)	グループタスクを通じた探究活動	ファシリテータ役のTAを中心とした課題解決学習	自分の持っている情報と他者が持っている情報をつなげて考えることができる 課題解決に向けて積極的に参加できる
まとめ	10:40 (10分)	ふりかえり	解答チェック 授業内容フィードバック	導き出した解答があっているかどうかではなく、自分がどのようにグループに貢献できたか等を振り返る

グループタスクの概要)

課題：

各自が持っている情報をもとにして、野球チームの
スターティングメンバーを確定する。

使用言語：

基本的には英語であるが、日本語も入る。

TA：

名古屋大学留学生及び附属学校ALTなど

参考資料：

Creative O.D. Vol.IV PP155「朝刊にまにあわせろ」
PressTime

4 中学1年B組 保健体育科 授業案

1) 教材・単元

「アダプテッドスポーツを創ろう」

2) 日時

平成31年2月8日（金）2限（11：00～11：50）

3) 場所

第2体育館

4) 対象生徒

中学1年B組（男子20名、女子20名、計40名）

5) 授業者

佐藤健太

6) 学習過程

アダプテッドスポーツの概念に触れ、既存のスポーツをみんなで楽しめるようにアレンジし、話し合いを経て、いざ実践しようという段階。

7) 本時の学習活動

(1) 目標

実践を通して浮き出た問題点や課題を、話し合い解決へ導く。

(2) 指導計画

1 時間目 アダプテッドスポーツについて知る

2 時間目 既存のスポーツをアダプテッドスポーツにアレンジしてみよう
グループで1つにまとめる

3 時間目 発表・意見交換・実践種目の決定

(3) 授業形態

協同的探究学習法（個別探究→協同探究→個別探究）により授業を展開する。

本時の展開

時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価 （『育てたい力』の項目）
導入 5分	点呼・体調チェック 本時の説明 体操	ルールを再確認	
展開① 15分	実践	実践を通して問題点・変更すべきルールなどについて考える。	安全や公平性などについて考え、問題点を探ろうとしているか。（A・C）
展開② 10分	中間交流	出た問題点を共有し、より良いルールにアレンジする。	自分の考えをわかりやすく伝えることが出来ているか。他者の視点や考え方に耳を傾け、受け入れることが出来ているか。（B・D）
展開③ 15分	再実践	改善したルールで実践をする。 さらなる改善点があればゲームの度にルールを変更する。	中間交流を踏まえて新たな問題点に気づき、その改善方法を導くことが出来ているか。（A・C）
まとめ 5分	まとめ	まとめと課題プリントの配布 （プリント内容：更にアップデートしたルールの提案。自分の意見。）	実践を通じて問題を発見し、その改善策を導くことができていないか。（A・C）

5 中学2年A組 国語科 授業案

- 1) 教材・単元
「意見文を書く」
- 2) 日時
平成31年2月8日(金) 2限(11:00～11:50)
- 3) 場所
高校3年C組 教室
- 4) 対象生徒
中学2年A組(男子20名、女子19名、計39名)
- 5) 授業者
杉本雅子
- 6) 学習過程
中学2年生は、国語の授業で『はじめよう、ロジカル・ライティング』を使い、話題・主張・理由を備えた意見文を3回書いた。また、総合人間科の授業で、全員が「生命と環境」をテーマにした個人研究を行い、その結果を2800字程度の文章にまとめている。今回は、総合人間科で行った個人研究を基に環境に関する意見文を書く。

7) 本時の学習活動

(1) 目標

- ・総合人間科の個人研究を基にして600字から800字の意見文を書く。
- ・意見文の理由の部分に、「反論」とそれに答える部分を取り入れる。
- ・「反論」について考えることで、意見文の説得力を高めることに役立てる。

(2) 指導計画

- 1 時間目 自分の意見文の構成メモを作る。
- 2 時間目 他者の意見文への反論を考える。
- 3 時間目 グループごとに反論を出し合い、答える。(本時)
- 4 時間目 構成メモを基に意見文を書く。
- 5 時間目 意見文の読み合わせと交流(感想や反論の意義について)

(3) 授業形態

協同的探究学習法(個別探究→協同探究→個別探究)により授業を展開する。

本時の展開

	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価 (『育てたい力』の項目)
導入	5分	・前回までの振り返りと本時の予告。	・本時の目標、流れについて理解する。	・ワークシートと構成メモを配布する。
展開	20分	〈協同探究①〉 ・グループごとに反論を出し合い、答える。	・自分の主張に対してグループの他の3人から反論をしてもらい、答える。 ・自分も他者に反論する。	・自分の考えをわかりやすく伝えることができているか。(D)
展開	15分	〈協同探究②〉 ・授業者が1つか2つのグループを取り上げ、反論の実演をしてもらう。	・他グループの実演を見ながら、自分だったらどう反論するか、答えるかを考える。 ・反論の意義について考える。	・できるだけいろいろな種類の反論がある例を選ぶ。 ・自分の意見文にどう生かすかを考えているか。(A)(C)
展開	8分	〈個別探究①〉 ・協同探究を踏まえ、良い反論とはどのような条件があるのか考える。	・どのような反論が意見文の説得力を高めるのに役立つかを考える。 ・自分の意見文に取り入れる反論を決める。	・意見交換を踏まえ、反論や意見文についての考えを深めているか、記述から観察する。(A)(C)
まとめ	2分	ワークシートの回収 次回の授業の予告	・グループごとに、ワークシートと構成メモを集めて提出する。	・次回、構成メモを基に意見文を書くことを予告する。

6 中学3年A組 社会科 授業案

- 1) 教材・単元
「名古屋の観光客を増やすには」
- 2) 日時
平成31年2月8日（月）2限（11：00～11：50）
- 3) 場所
中学3年A組 教室
- 4) 対象生徒
中学3年A組（男子20名、女子20名、計40名）
- 5) 授業者
隅田久文
- 6) 学習過程
主権者教育の一環として地方自治の単元で名古屋の観光客を増やす方策について検討する。

7) 本時の学習活動

- (1) 目標
名古屋の観光客を増やす方策について、評価の高かった班の発表を聞き、よりよい方策にするための改善点について考察する。
- (2) 指導計画
 - 1 時間目 名古屋の観光の現状認識
 - 2 時間目 地域活性化の方策
 - 3 時間目 地方自治のしくみ
 - 4 時間目 名古屋の観光客を増やす方策とは①（グループ内相互評価）
 - 5 時間目 名古屋の観光客を増やす方策とは②（グループでの検討）
 - 6 時間目 発表会（1班5分）・評価
 - 7 時間目 発表会②（代表の班）・全員での検討・評価 ※本時
- (3) 授業形態
個人探究と協同探究を組み合わせる展開する。

本時の展開

時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価 （『育てる力』の項目）
導入 （3分）	本時の説明 発表①準備	本日の流れを説明する 発表①の班は準備をする	
展開① （17分） 協同探究 個別探究 協同探究	発表① 改善点の検討 改善点の発表	発表①を行う 個人で改善点の検討を行う グループで改善点の検討を行う 改善点を発表する	発表を聞き、改善点を考察する （A、B、C） グループで意見交換し、改善点をまとめる （C、D） 意見を他者に分かりやすく伝える （A、D）
展開② （18分） 協同探究 個別探究 協同探究	発表②準備 発表② 改善案の検討 改善点の発表	発表②の班は準備をする 発表②を行う 個人で改善点の検討を行う グループで改善点の検討を行う 改善点を発表する	
まとめ （12分） 協同探究 個別探究	講評 個人の振り返り	名古屋市役所ナゴヤ魅力向上室の方に講評をしていただく。時間があれば政策立案をする上でのポイントについてもお話していただく 学習全体の振り返りを行う 他の班の発表から学んだことや、政策を考える上で大切なことは何かについてなどを個人でまとめる	行政機関の方の話を聞き、自分たちの案の良い点・改善点に気づく（A、B、C） 振り返りを通して自分の考えを再構築する（A、B、C、D）

7 高校1年 課題探究Ⅱ 授業案

1) グループ課題

「名大附生は今以上のジェンダー平等を求めるべきか？」

2) 日時

平成31年2月8日（金）1・2限（10:00～11:50）

3) 場所

高校1年A組 教室

4) 対象生徒

高校1年（男性7名、女性13名、計20名）

5) 授業者

亀井千恵子

6) 学習過程

要項冊子参照

7) 本時の学習活動

(1) 目標

研究発表を行うことでPBLの総括を行う。

学習過程を各自で振り返り、研究手法や手順についてよかった点、改善すべき点を言語化し、来年度の個人探究に活かせるようにする。

(2) 指導計画

年間指導計画参照

(3) 授業形態

グループ単位の発表・話し合い、個人単位でのまとめ

本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・評価
10:00～（50分）	班ごとの研究発表と質疑応答 ・1班から順に、10分発表する ・質疑応答後、担当教員からの助言を受ける。	・発表を聞きながらメモを取らせ、自分の意見や疑問点を見つけさせる ・振り返りのワークシートを配布してから休憩に入る
10:50～（10分）	休憩	
11:00～（10分）	個人で振り返りのワークシート記入	個別探究1
11:10～（20分）	班でワークシートの内容について共有、意見交換	協同探究1 メモを取らせ、誰が発表者になってもよいように準備させる
11:30～（15分）	グループ全体に向け、各班で出た意見を発表する	協同探究2 教師が各班から1名に発表させる
11:45～（5分）	他の人や他のグループの振り返りから学んだことをワークシートにまとめる	個別探究2 授業終了時にワークシートを集め、個別探究1と2の記述内容を比較し、他者（他生徒、教員）の意見を取り入れ、考えが深まっているかを教員が評価する。

8 高校1年 課題探究Ⅱ 授業案

1) グループ課題

「私達は自分の意志でペットボトルの水を買っているのか」

2) 日時

平成31年2月8日（金）1・2限（10:00～11:50）

3) 場所

メディア教室

4) 対象生徒

高校1年（男性9名、女性11名、計20名）

5) 授業者

今村敦司

6) 学習過程

要項冊子参照

7) 本時の学習活動

(1) 目標

研究発表を行うことでPBLの総括を行う。

学習過程を各自で振り返り、研究手法や手順についてよかった点、改善すべき点を言語化し、来年度の個人探究に活かせるようにする。

(2) 指導計画

年間指導計画参照

(3) 授業形態

グループ単位の発表・話し合い、個人単位でのまとめ

本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・評価
10:00～（50分）	班ごとの研究発表と質疑応答 ・1班から順に、10分発表する ・質疑応答後、担当教員からの助言を受ける。	・発表を聞きながらメモを取らせ、自分の意見や疑問点を見つけさせる ・振り返りのワークシートを配布してから休憩に入る
10:50～（10分）	休憩	
11:00～（10分）	個人で振り返りのワークシート記入	個別探究1
11:10～（20分）	班でワークシートの内容について共有、意見交換	協同探究1 メモを取らせ、誰が発表者になってもよいように準備させる
11:30～（15分）	グループ全体に向け、各班で出た意見を発表する	協同探究2 教師が各班から1名に発表させる
11:45～（5分）	他の人や他のグループの振り返りから学んだことをワークシートにまとめる	個別探究2 授業終了時にワークシートを集め、個別探究1と2の記述内容を比較し、他者（他生徒、教員）の意見を取り入れ、考えが深まっているかを教員が評価する。

9 高校1年 課題探究Ⅱ 授業案

1) グループ課題

「附属学校の避難訓練は機能しているのか」

2) 日時

平成31年2月8日(金) 1・2限(10:00～11:50)

3) 場所

高校1年B組 教室

4) 対象生徒

高校1年(男性8名、女性12名、計20名)

5) 授業者

松本拓也

6) 学習過程

要項冊子参照

7) 本時の学習活動

(1) 目標

研究発表を行うことでPBLの総括を行う。

学習過程を各自で振り返り、研究手法や手順についてよかった点、改善すべき点を言語化し、来年度の個人探究に活かせるようにする。

(2) 指導計画

年間指導計画参照

(3) 授業形態

グループ単位の発表・話し合い、個人単位でのまとめ

本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・評価
10:00～(50分)	班ごとの研究発表と質疑応答 ・1班から順に、10分発表する ・質疑応答後、担当教員からの助言を受ける。	・発表を聞きながらメモを取らせ、自分の意見や疑問点を見つけさせる ・振り返りのワークシートを配布してから休憩に入る
10:50～(10分)	休憩	
11:00～(10分)	個人で振り返りのワークシート記入	個別探究1
11:10～(20分)	班でワークシートの内容について共有、意見交換	協同探究1 メモを取らせ、誰が発表者になってもよいように準備させる
11:30～(15分)	グループ全体に向け、各班で出た意見を発表する	協同探究2 教師が各班から1名に発表させる
11:45～(5分)	他の人や他のグループの振り返りから学んだことをワークシートにまとめる	個別探究2 授業終了時にワークシートを集め、個別探究1と2の記述内容を比較し、他者(他生徒、教員)の意見を取り入れ、考えが深まっているかを教員が評価する。

10 高校1年 課題探究Ⅱ 授業案

1) グループ課題

「附属高校生は学校生活において手洗いをしているか」

2) 日時

平成31年2月8日（金）1・2限（10:00～11:50）

3) 場所

高1多目的教室

4) 対象生徒

高校1年（男性8名、女性11名、計19名）

5) 授業者

加藤容子

6) 学習過程

要項冊子参照

7) 本時の学習活動

(1) 目標

研究発表を行うことでPBLの総括を行う。

学習過程を各自で振り返り、研究手法や手順についてよかった点、改善すべき点を言語化し、来年度の個人探究に活かせるようにする。

(2) 指導計画

年間指導計画参照

(3) 授業形態

グループ単位の発表・話し合い、個人単位でのまとめ

本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・評価
10:00～（50分）	班ごとの研究発表と質疑応答 ・1班から順に、10分発表する ・質疑応答後、担当教員からの助言を受ける。	・発表を聞きながらメモを取らせ、自分の意見や疑問点を見つけさせる ・振り返りのワークシートを配布してから休憩に入る
10:50～（10分）	休憩	
11:00～（10分）	個人で振り返りのワークシート記入	個別探究1
11:10～（20分）	班でワークシートの内容について共有、意見交換	協同探究1 メモを取らせ、誰が発表者になってもよいように準備させる
11:30～（15分）	グループ全体に向け、各班で出た意見を発表する	協同探究2 教師が各班から1名に発表させる
11:45～（5分）	他の人や他のグループの振り返りから学んだことをワークシートにまとめる	個別探究2 授業終了時にワークシートを集め、個別探究1と2の記述内容を比較し、他者（他生徒、教員）の意見を取り入れ、考えが深まっているかを教員が評価する。

11 高校1年 課題探究Ⅱ 授業案**1) グループ課題**

「録音の声と自分が認識する声は違うのか」

2) 日時

平成31年2月8日(金) 1・2限(10:00～11:50)

3) 場所

高校1年C組 教室

4) 対象生徒

高校1年(男性9名、女性12名、計21名)

5) 授業者

斎藤瞳

6) 学習過程

要項冊子参照

7) 本時の学習活動**(1) 目標**

研究発表を行うことでPBLの総括を行う。

学習過程を各自で振り返り、研究手法や手順についてよかった点、改善すべき点を言語化し、来年度の個人探究に活かせるようにする。

(2) 指導計画

年間指導計画参照

(3) 授業形態

グループ単位の発表・話し合い、個人単位でのまとめ

本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・評価
10:00～(50分)	班ごとの研究発表と質疑応答 ・1班から順に、10分発表する ・質疑応答後、担当教員からの助言を受ける。	・発表を聞きながらメモを取らせ、自分の意見や疑問点を見つけさせる ・振り返りのワークシートを配布してから休憩に入る
10:50～(10分)	休憩	
11:00～(10分)	個人で振り返りのワークシート記入	個別探究1
11:10～(20分)	班でワークシートの内容について共有、意見交換	協同探究1 メモを取らせ、誰が発表者になってもよいように準備させる
11:30～(15分)	グループ全体に向け、各班で出た意見を発表する	協同探究2 教師が各班から1名に発表させる
11:45～(5分)	他の人や他のグループの振り返りから学んだことをワークシートにまとめる	個別探究2 授業終了時にワークシートを集め、個別探究1と2の記述内容を比較し、他者(他生徒、教員)の意見を取り入れ、考えが深まっているかを教員が評価する。

12 高校1年 課題探究Ⅱ 授業案

1) グループ課題

「長さの基準は“m”でよいのか」

2) 日時

平成31年2月8日（金）1・2限（10:00～11:50）

3) 場所 地学教室

（高校棟 1階）

4) 対象生徒

高校1年（男性13名、女性7名、計20名）

5) 授業者

渡辺武志

6) 学習過程

要項冊子参照

7) 本時の学習活動

（1）目標

研究発表を行うことでPBL（問題解決学習法）を用いて総括を行う。

学習過程を各自で振り返り、研究手法や手順についてよかった点、改善すべき点を言語化し、来年度の個人探究に活かせるようにする。

（2）指導計画

年間指導計画参照

（3）授業形態

グループ単位の発表・話し合い、個人単位でのまとめ

本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・評価
10:00～（50分）	班ごとの研究発表と質疑応答 ・1班から順に、10分発表する ・質疑応答後、担当教員からの助言（生徒の助言等）を受ける。	・発表を聞きながらメモを取らせ、自分の意見や疑問点を見つけさせる ・振り返りのワークシートを配布してから休憩に入る
10:50～（10分）	休憩	
11:00～（10分）	個人で振り返りのワークシート記入	個別探究1
11:10～（20分）	班でワークシートの内容について共有、意見交換	協同探究1 メモを取らせ、誰が発表者になってもよいように準備させる
11:30～（15分）	グループ全体に向け、各班で出た意見を発表する	協同探究2 教師が各班から1名に発表させる
11:45～（5分）	他の人や他のグループの振り返りから学んだことをワークシートにまとめる	個別探究2 授業終了時にワークシートを集め、個別探究1と2の記述内容を比較し、他者（他生徒、教員）の意見を取り入れ、考えが深まっているかを教員が評価する。

13 高校2年 課題探究Ⅱ 授業案

1) 教材・単元

2) 日時

平成31年2月8日(金) 1・2限(10:10～12:00)

3) 場所

高校2年A・B・C組、高2多目的教室、書道室、物理室

4) 対象生徒

高校2年(男子58名、女子61名、計119名)

5) 授業者

湯浅郁也、大林直美、松本真一、市川哲也、棚橋美加子、曾我雄司

6) 学習過程

要項別紙参照

7) 本時の学習活動

(1) 目標

学習過程を各自で振り返り、研究の進め方についてよかった点、改善すべき点を言語化し、来年度の論文に活かせるようにする。

(2) 指導計画

1 時間目 事前にプリントへの記入(個別探究Ⅰ)

2 時間目 研究成果報告・振り返り①(協同探究ⅠⅡⅢ+個別探究Ⅱ)

3 時間目 研究成果報告・振り返り②(協同探究ⅠⅡⅢ+個別探究Ⅱ) 本時

(3) 授業形態

グループ単位の発表・話し合い、個人単位でのまとめ

本時の展開

	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価(『育てたい力』の項目)
導入	10:10～(5分)		・前時の振り返り ・本時の目標の確認	
展開Ⅰ	10:15～(80分)	研究発表と質疑応答	・1人5分間の発表 (研究成果の報告4分間、振り返り1分間) ・質疑応答3分間 ・個人での記録用紙(1)に記入	㊟発表を聞きながら記録用紙(1)にメモを取り、自分の意見や疑問点を見つけさせる。 ㊞教員は授業後、記述内容から考えの深まりを評価する。 協同探究Ⅰ
展開Ⅱ	11:35～(5分) 11:40～(10分)	意見交換 発表 (10名程度)	・班で「参考になったと思った」「よいと思った」ことを共有、意見交換 ・各班からグループ全体への発表 (1班1分程度)	協同探究Ⅱ ㊟1分程度で発表できるよう準備させる。 ㊟誰が発表者になってもよいように準備させる。 協同探究Ⅲ ㊟指名して各班1名に発表させる。 ㊟教員は黒板を使い発表で出たものを全体に共有する。
まとめ	11:50～(10分)	本時の振り返り	・個人で記録用紙(2)に記入	個別探究Ⅱ ㊟記録用紙(2)への記入をさせる。 ㊞これまで経験してきたことを、具体的なケースに応用できるかを、記述から評価する。

14 平成30年度第1回SGH運営指導委員会議事録

1) 日時

平成30年11月15日（木） 12時30分～14時30分

2) 場所

名古屋大学教育学部附属中・高等学校 第1会議室

3) 出席者（敬称略）

運営指導委員

辻村哲夫（公益財団法人 学習情報研究センター 理事長）

砂山幸雄（愛知大学 現代中国学部 教授）

山田和人（同志社大学 文学部国文学科 教授）

古澤礼太（中部ESD拠点協議会 事務局長）

堀 雅寿（愛知電機㈱ 社外監査役、
ユニゾンキャピタル㈱マネジメント
アドバイザー）

磯輪英之（株式会社ISOWA 代表取締役社長）

本校教職員

校長、三小田、石川、原、福岡

4) 内容

（1）学校長挨拶・自己紹介

（2）SGH概略

・資料1枚目をご覧ください。このポンチ絵を使って4年目になりますが、特徴としては中高大接続、本校の生徒が名古屋大学の学生になるのが大体10%くらいです。10%くらいの子が名古屋大学に進学しておりますので、その子達は中学3年、高校3年、大学4年で10年間ここ（名古屋大学キャンパス）にいます。そしてまた上の修士課程・博士課程に行く子たちもいますので、その子たちを考えるともう20年近くこのキャンパス内で生活している子達もいます。そういった意味で名古屋大学のキャンパス内に位置しているという特徴を生かしまして中学校、高等学校、そして大学と接続したカリキュラムを作っています。中学生は課題研究Ⅰという授業の中で幅広い興味関心を育てて行こう、作って行こうということで中学校1年生、2年生、3年生様々な分野に関して学年でテーマを決めて、そのテーマに沿った研究をそれぞれ個人でしています。高校に進学しますと今度は課題研究Ⅱ、課題研究Ⅲというのは総合的な学習の時間の中でやっていますが、その中でPBLのやり方という学び方を学ぶということを高校1年生でやっています。高校2年生から本格的に課題研究を始め、高校3年生でレポートにまとめるということで、今日高校3年生はレポートにまとめる作業をやっています。多分、今日は見に行かないと思いますが、黙々と今、レポートを書いています。そのような形で中学校で幅広い興味関心を育成

し、その中から特に自分の興味関心のあるテーマを1つ選び、高校3年間かけてPBLを中心にリサーチプロジェクトをやっていくということです。それが課題研究開発単位Ⅰ、黄色の帯の部分になります。そして今後、新しい学習指導要領が平成34年から高等学校のほうでスタートしていくのですが、そこでよく言われているアクティブラーニングというものを本校ではもう随分昔からやっています、SSHでは理科・数学に関してのアクティブラーニングをやっています。これを協同的探究学習と本校では言っており、それを全てのカリキュラムで共同的探究学習を入れて行こうということでこのSGHの中でも社会・国語、文系教科、それから実技科目にまでこういった協同的な学びというものを入れて、学校のカリキュラム全体を協同的な学びにしていく、そういう取組が研究開発単位Ⅱになります。そして研究開発単位Ⅲ、真ん中の部分になりますけれど、先ほどから話題に出ていますグローバル拠点、グローバルという言葉が出てきます。グローバル拠点、名古屋大学のグローバル海外事務所を活用させていただいて、その名古屋大学の海外事務所と連携をしながら、そしてまた大学と連携しながらそこで表現力とか判断力とかを身に付ける、そういったプログラム、3本の大きなプログラムを行っています。国内拠点としましては名古屋大学、そして海外拠点としましてはアジア拠点、それから北米拠点。アジア拠点はモンゴル、そして北米拠点は米国にそれぞれ拠点となる高等学校を1つずつこのSGHの期間中、姉妹校提携を結ばしていただきまして新モンゴル高校、それからチャペルヒル高校、それからもう1つはSSHのほうですけれどもバードハイスクールと言うニューヨークにある高校、その3校と姉妹校提携を結んでいきました。お互い10名ずつですけれど毎年行ったり来たりということで共同プログラム、同じテーマに沿った共同プログラムを行っています。そういった学びを持って大学、TGU、トップ・グローバル・ユニバーシティ、この場合名古屋大学ですけれども、日本中にある色々なトップ・グローバル・ユニバーシティに子供たちは進学をしています。文科省からは国際的な教育に力を入れている大学に何%進んだかという指標を出せと言われていますが、今までの傾向から行くと大体30～40%の子たちです。そのくらいの子たちがいわゆる国際的な教育に力を入れていると言われている大学に進学している。そういった形でSGH、それからSSH両方を行っている学校は日本中でも珍しく、そしてまたSSH・SGH両方のプログラムを同じ生徒が行っているというのは日本でも少ない学校じゃないかなと思っています。

(3) SGHリトアニア研修

(4) SGH成果発表会

- ・2月8日公開授業で研究発表を行い、その後振り返りをした後はどういうふうに繋がっていくのですか？

⇒発表会の日の後ですが、これは2月の段階です。各自の研究テーマ決めに入ってまいります。自分のテーマを3月半ばまでに決めて提出し、高校2年生に行く時にそれを6つのグループに分けなおします。その6つのグループに分けたら、新しい高2担任がどこかを持つというにして指導教員が決まってくるので、そこからが本当に自分の研究が始まる形になります。

- ・そうすると2回目の個人の研究に向けて今回1回目にやったものをどういうふうに活かしていくかということを考えさせるにはどうしたらいいのか、ということですね。

⇒テーマは違いますので自分の興味関心がないところにも入っているけれど、練習でやっているということです。

⇒今は教員がテーマを決めて、そのテーマに沿って子供たちがPBLをしている。PBLの練習です。どうやったらいいのか、それを高校2年生になった時には自分でやってみましょうという取組です。

- ・発表会の案内はどなた宛に案内していますか？どんな方が来られますか？保護者の方は？

⇒教育委員会系の方々です。基本的に保護者には案内しておらず、SGH校にアソシエイトを加えて200校くらいです。あとは近隣の中学校の先生ですとか、県内の高校の先生です。

- ・先ほどのリトアニアの話。今後、リトアニアとの交流をどのように発展させていこうとお考えでしょうか。日本とリトアニアの関わりは確かに千畝の関係はありますが、それ以外にはなかなか見つけにくいというのもあるかもしれない。リトアニアという日本にあまり馴染みのないと思われるところでどういう形で交流を深めていけるのか、どういうプランをお持ちなのか。

⇒リトアニアについては千畝が中心というか、その千畝だけではなく千畝に関する事で本校だけではなく瑞陵高校と一緒に深めていこうと思っています。ただ、まだ姉妹校提携もしておらず、名古屋大学にもあまり留学生は来ていないようですし、実際に行き来してやはり貨幣価値が随分違うなということをちょっと感じたところで、おっしゃるように今後どんなふうに対等な形で進めていけばいいのかな

という段階です。千畝のことはリトアニアにはそこそこにはありますしリトアニアの高校生は千畝のことを知らないことはないのですが、当然そればかり考えながら過ごしているわけではなく、違う興味のところも色々あって高校生同士だと話は弾んでいるのですが、では何か踏み込んだところと言うとやはり千畝を軸にはしながら行き来が続けられればいいなというふうです。

- ・リトアニアの話ですが、私達が今ESDを進めている中で、国連が持続可能な開発目標というのを始めて17つのゴールが設定されておりその中に平和というテーマがあるので、やはり平和について考える機会というのは非常に重要だと思いますし、国を越えてというのは意味があると思います。その平和を考える時に平和でない状況があったということで千畝のような人が活躍をしたのですが、その平和でない状態がどのように出来上がっていったかということも勉強する価値は特にあると思います。また、リトアニアの高校生は日本のことを知らないし、知らない日本の状況を教えてもらうことはすごく重要だと思います。平和でない状況には被害者になった側面と加害者になった側面というのがやっぱりあると思います。今、歴史教育などは非常にセンシティブな問題で難しいとは思いますが、生徒自身が被害者として我々が平和じゃない状況に置かれたということと、加害者としてこんなことをやってしまったということをやはりきちんと理解して、自分なりでいいと思いますが、それで追っていくようなことで交流ができればいいかなと思います。

⇒今、中学3年生で広島、高校2年生で沖縄に研究旅行に行くのですが、先ほどおっしゃったように、被害・加害というのでしょうか、今、戦争は誰もしたくないし、しないと思っているけれども、皆な前からの人もそうだったんだけれど何故こういう状況になったかというのを第一次世界大戦から描かれているテレビ番組のビデオを手がかりに考えていければと思います。

(5) 課題授業見学

(6) 評価及び次期SGH

(7) 指導・助言

- ・今日発表していた6つのテーマ、それからこのポンチ絵の6つの課題、心・文化・生命はどういう関係になるのですか。これもやはり1つであるのでしょうか。避難訓練とかお手洗いとか結びつかないと思ったのですがどうでしょう。

⇒今回は1年生ですので練習です。6つの卵は子供たちが自分でテーマを作る時、こういった6つの卵に関したようなテーマを作りなさいということです。

- ・ お願いというか要望をしようと思っていたのが、指定が終わっても引き続きやって欲しい、見えるモデル校として中・高校を変えていく、そういう役割、先導的役割を担ってほしいとお願いしようと思っていましたが、次にまたチャレンジをしようということですので、これはこれでいいです。その時にこの学校だけじゃなくていくつかの学校を巻き込んでやっていくということを今日初めて知ったのですが、そうだとするとそのテーマ設定がやはり核になると思います。そういったものを少し前からやっておいて、それでやはり共通に「これだ」というテーマで設定したほうがいいんじゃないかと思います。ここの学校は学校としての気持ちもあるでしょうが、少し広くした形でやって備えるということがいいんじゃないかと思います。テーマは別です。高校生たちすごく元気によくやっていたし、なかなか緻密に調べて報告しているおり実力的にはもう全然申し分ないと感じたので、そういうふうにしてやったほうがいいのかと思いました。だから今度は是非多いにやってもらいたいと思いました。それからその時に1つ関連していたんですけど、核になるものとしてやはり各教科と現在取り組んでいる総合との連携、有機的連携というのを明確にしておく必要があるのかと思います。生徒達にも「なるほどこれは社会科で勉強したこと、こういうことを活かしているのかな」とか。「理科で学んだことがここで生きているのかな」とかね、そういうことが実感できるようなそういう他の教科との連携、有機的連携のあるそういう総合的な学習の時間の推進がいいのかなと思います。是非、次を確保するために、少し前にテーマ設定なども相談しながらやっていかれたらいいんじゃないかと思います。若干本校の特色が薄れるかもしれないけれど戦略的になることが良いと思います。その時もやっぱり核となるのは各教科での学習が原則で、それを活用・応用するような形に位置づけて今のこれがあると思うので、非常に成果などいいと思うので、そういうところをちょっと意識した形でその学習が展開していくといいのかなと思いました。

⇒例えば世界における衛生問題だとか水の重要性だとかそれに絡んでいけるとか広げることはできるので、そこで単独ではないというふうには考えています。

- ・ その辺りのところは、その時生徒がそういうこともわざわざ意識することではないですが、生徒にちょっと知らせる技術ですね。そうすると興味半分で面白かったね、じゃ勿体ないと思いました。

- ・ 今の生徒達は中学生の時からで、今年で4年目をやっているということですか。さすがに非常に慣れているっていう感じでちょっと感動したという大袈裟ですけども、上手いなと思いました。先ほどのテーマ設定の問題で今回の6つのテーマは先生方が決められて学生にこうやりなさいと言う形ですね。来年度は生徒達が自分でテーマを決めるということでしょうか。その際に今回のこれは練習問題だから無関係に選んでもよいという話になるのでしょうか。

⇒今回のテーマを選ぶにあたっては無関係に選んでいます。

- ・ 私、大学でゼミなどをやっているとならばテーマ設定はそれだけで実は1つ大きな課題で、どうやってテーマを選ぶかに相当時間をかけるんですね。すると今の生徒たちが次に自分のテーマを選ぶ際にどのくらい時間をかけて選ぶのでしょうか。もう勝手に選んでいいってわけじゃないですよ。当然あるプロセスを経て選ぶというふうに考えていいんですか。そこに先生方との話し合いなどあるのでしょうか？

⇒正直申し上げて3月の時点ではグループ分けの学年の境目があってあまり深く考える時間はありませんで、本人の希望通り書くのですが、分けた後には1人ずつ面談して、20人を面談していきます。要するに小さすぎでも困りますし大きすぎでも困りますし、そこを1人ずつ。最初から半分とは言いませんが、半分近くはまあこれで行けそうだというテーマを持ってくるので、残りの10人を頑張って指導していくというような感覚であります。

- ・ では、先生方がちゃんとご指導されるということなんだと思いますが、そうすると先ほどの質問と重なりますが、大きいテーマで例えばすごく大きなテーマでこれで皆さん個別のテーマを考えなさいという形にはならないということですか？他の高校とかで海外の高校と共通テーマを先ず決めましょうかというやり方にはならない？

⇒そうですね。この課題研究の中ではすぐに海外というふうにはならないです。ただ、終わりがけになればそうやっていく生徒もいて、海外にアンケート取っていいですかとか、ネット使ってやっていいですかとか言ってきますので、ある程度自分の研究が固まってから広げて行くという感じかなというふうに思います。

- ・ PBLの立場から言えば、今お二方から出ている大きな課題とか小さな課題とかというのは結局視点の移行なんです。これはこういう事をやっているんだだけ

れどもそれをこういう目で見ればこれくらいのより大きな問題があるんだよ、と言うようなことを生徒自身がどれだけ発見できるかというのが結局最後の成果なんです。その時にそういう視点がどう変わるかというふうな仕掛けとか仕組みをどういう形でそのプログラムの中に入れて行くかというのが一番難しいところですね。今日の話、生徒さんの話を聞いて面白かったのは最初のところの1人目の子が「前置きが長くなってしまいました」って言っていましたけれど、あれくらい丁寧なほうがいいですよ。あの子はそのテーマがどういうふうに見えるべきなのかっていうような、ちょっと視野を広げたところから再定義をしているんですね。ああいうふうな物の見方ができるようになってくるといいなということです。それから2番目の子がやっていたのは定義をするんですね、これは学問の基本ですからこれを言っているんですが、この定義が「私達はこういう定義でやっています」っていうふうなこと。それから3番目4番目になってくるとその手続きですね。手続について細かく指摘が来ていること。このあたりの所がやはり一番要になるところでその成果がちょっと出ているのかなという点が私が一番頼もしく思ったところです。ただ、その時に先ほどの視点の移行と言いましたけれどそれを自分の力でやるというのはかなり難しいんです。その時に結局は相互批判がどれだけ出来るかなんです。ですから例えばその1つのチーム、4チームだったら4チームやっている中でどれくらい相互批判が出来るような学びのコミュニティみたいなものを育てて行けるかっていうことです。自分達が育めるかにかかっているんです。それは先生がこうこうしなさいでは身につかないので、自分達はそのコミュニティの学びの共同体みたいなやつを上げるか下げるか、それがもう全てだというふうに思っています。それが出来れば視点の移行も簡単に出来るようになってくる。じゃあそれが育めるようにどういう形で皆さんは今のチーム作りみたいなことをやっていらっしゃるのかということが大事かなと思うのでその点ちょっと教えていただきたい。それは男の子2人で女の子が何人とか、男女別の分け方とか色々テクニカルな部分もあるとは思いますが、そういう学びの共同体を深めて行けるようなという意味で意識されていることがあるかないかという事を聞きたいと思いました。それから今日発表して、あとは質疑応答の力が今一番求められているところで、プレゼンテーションは練習すれば出来るんですけど、質問されたらそれに対してどれだけ適切にきちんと真摯に答えられるかという能力でほぼプレゼン・発表の力というのが測れるというふうに言われ

ていますので、終わった後でそのあたりの所をどういうふうな形で先生方からのフィードバックが各チームに行っているのかこれもちょうと教えていただきたいと思いました。それから最後にこれは蛇足ですけども、今後の展開の中で色々な学校と提携していくという場合に、私は一番大事だなと思っているのは最後の出口のところですよ。ですから合同で成果の報告会みたいなものをきちんとやってもらいたいと思います。それは交換だけではなくて、もしかしたら高校も大学も合わせたような形でやったら面白いかなと思います。そこで初めて彼らは自分自身で気付くというようなことがあると思いますので。そういう学びの機会もあっていいのではないかなと思います。

⇒私達もその視点の移行っていうことをあんまり考えたことがなかったものですから、新しい考え方をしていかなきゃいけないと思います。今は多分やっていないと思います。個人ではやっているかもしれませんが。

・多分、個々ではやっているんです。個々ではやっているんですけどそれは全体の問題にはなっていないという。それを個々でやっていることを横に広げていけるような、そういう体制を作っていけるようになったらすごくPBLの一番の勘所が出てくると思います。

⇒そこの個人差に苦しんでいます。1対1でやればそれが出来る。その子その子は出来る。でもそれを聞いている子がそこを自分の事に置き換えて視点に移せるかというそれはすごくレベルが高くて一気に難しくなる。そこが難航しています。

・我々がやっているPBLでも同じことです。そこが一番難航するんです。ですから課題が本当に皆の課題になっているのかどうかというのが要なんです。それさえ皆がなるほどこれこそ我々が取組むべき課題だということが明らかになればコミュニティがぎゅっと質が深まっていくということが明らかなのですが、だから本当にそういうチームの課題のようなものをみつけられるか、その課題と自分が深めていくべき課題というのがきっちり合っているかどうかですね。そのあたりの所が今後の課題になっていくのかなという気がします。

・私はさっき言っていた共同体みたいなものが今日見させていただいた2つのそれぞれのチームの中でかなり出来てきているので、これをベースにしながら更に上へ行けるようなちょっとした工夫を加えていっていただけると面白いかなと思います。

・以前、多分、企業の中でも言葉の定義がすごく大事だという話をしたと思うんですけどさっきの授業を聞いて凄いなと思いました。質問のお話ですが私も時々講演することがあるのですが、やはり質問がないとがっかりするんですよね。自分の話がいかにつまらなかったかと反省しきりになります。日本人は大人になってもほとんどそうですね。よほどの有名な高いお金を払っている講演だと別ですけど、ただで行く講演は質問しないですよね。日本人の習性というかな。そんな気がしますね。あとはちょっと別の観点でお話をしますとさっき本を出されていましたよね。私はこういう広報活動というのはとても重要だと思っていて、皆さんのモチベーションにもなるし生徒のモチベーションにもなると思います。附属学校がこんなことをやっているんだという。私は名古屋に住んでいないので分からないのですが、少しでも多くの方が分かってくれるともっとより良い物になっていくような気がするんですね。そういう広報戦略というのは企業ではかなりお金をかけてやるんですけどお金がないでしょうから、やり方を考えてもう少し広報活動をするよりここにスポットが当たって良い結果になるのかなって感じがしました。それとさっき英語力があがったと色々な表を出してくれましたけれど、多分皆さんの高い理想を考えていくと本当の評価というのはSGHのプログラムを受けた人たちが社会人になってどんな活躍してくれるかという、とても長い期間のかなり先のことになると思います。そういう点も含めてこんな形でこう人材像というんでしょうか、活躍像でもいいんですけど、そういうものもそろそろ描いてもいいんじゃないかなと思います。何でこんなことをお話するかというと、今日授業見学をして3年前と格段に先生のレベルが上がっていると思うんです。さっきの生徒がきちんとお話が出来たというのはやはり先生の熟練度というか、相当レベルが上がっているからじゃないかという気もするんです。生徒のレベルはもちろん上がっているでしょうけども、より先生がちゃんと真面目にやっているからこそこうなっているような気がするんです。であれば、より高いレベルのそういう長期的目標を掲げてもいいかなという気がしました。

・会社でもそうですが、議論していて相手が言ったことによって何か自分の新しい気付きが得られるとか、あるいは今まで思い付かなかったような視点が提供されてそれがきっかけで新しいアイデアが生まれるとかという事があるんですが、発表の質疑応答や発表されたことの内容について何か自分が分からないことを質問するというよりも、寧ろ相手

に何か新しい気付きの発想を与えられるような質問をするということを生徒に事前にアナウンスして、質問をしたということで自己満足するということではなく質問された人がそういうふうに感じたかという点が一番大事なことだと思うので、それを例えば質問された人は自分が受けた質問の中でそういった自分がはっと思わされるような質問があったかどうかとか、誰がしてくれたどんな質問でそれに対してどういう自分自身の気付きが得られたかという事を集めるような取組みをするとそういうものが段々集まって来て、より質疑応答のレベルが高まってくるかなと思います。ただ単に分からないからこれ聞きますという事が目的の発表ではないと思うので、そういう取組方も良いのではないかと思います。

・大変楽しく授業を見させていただきました。私も大学で教えていますので質問がなかなか出にくいことをどうやって質問させるかということに知恵を絞ったりしていますが、今日かなり海外の若い人のようにワッと手が挙がっていたのでちょっとびっくりしました。ちょっと細かい質問ですが、そういう状況を作り出すことに苦勞されたり、苦勞というか何かコツみたいなものがあるのでしょうか。恐らくその中にはかなり覚めた子供がいて周りの人がそういう雰囲気を感じてだんだん手が挙がらなくなるという状況が普通の高校や大学も含めてあると思うのですが、何かそれを打破するような知恵があったのかということをお話していただきたい。また、新しい申請をされるということで素晴らしいなと思っております。このWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）というのは私も初めて見たんですけど、具体的な取り組みの中にグローバルな社会課題研究ということで早速ここにまたSDGsというものが乗っておりますので、このことについて私が大学等でも話していることをお伝えします。まずSDGsはSustainable Development Goalsということで、環境や人権や貧困等の17つの目標を世界中で15年間かけてクリアしていこうということであります。それが2016年に始まって2年間ですけれども、意外や意外、企業が飛びついたというところがあって、では企業の皆さんは何をやっておられるかという、皆が皆そうではないんですけど「我々の会社はこのSDGsの14番を一生懸命やっています。素晴らしい会社です」、ということで、企業のイメージアップに使われています。それは片面では非常に良いことなんですけれども、それによって全てが隠れてしまうということで最近ではSDGs Washという言葉が流行ってきているくらいSDGsで企業がやっている事の負の部分に関しても洗い流されてしまうんじゃないかというこ

とがあります。それで今こういった活動をする時に例えば先ほども手を洗うことが水と関わりがあるのでこれはSDGsの6番に水の安全のような話があるのでそれに当てはまりますよと、そういうラベリングの作業というのが最初にあり、それはそれで重要だと思います。ただSDGsの本質というのはその17つのゴールの同時達成であったり、あるいは相互関連をいかに深めていって総合的に持続可能な社会をつくるかということです、それをどこかのタイミングで学習者が気付いたりすることが必要なのではないかと思いました。例えば先ほどの手を洗うという話の中でそれは水の大切さを考えるということに直接的にはつながると思います。しかし、先ほどアンケートを取りますということがありましたが、女の子が手を洗っていないとして本当にアンケートに「私は洗っていません」と書くかなと考えたらちょっと書かないじゃないかなっていうところもあります。そういう男女の答え方の違いみたいなことを考えていくとジェンダーの話にもつながりますし、温風機で手を乾かすということであればエネルギー的な問題とか、あるいはCO2の話にもつながって行く。そういう広がりを感じくような仕組みがあればいいなと、またそういう気付きのあるプログラムを考えるということで申請を出せばこのSDGsというのは非常に使い勝手があるんじゃないかなと思います。

- ・世代的なものもあるんでしょうか、若い人って結構最近マイクを渡しても手は挙げないけれどマイク渡したらサッと話すみたいなのところがあって、私はこれはカラオケのせいじゃないかなと思っているんです。僕たちは昔は恥ずかしくて手が震えたりして話していましたけど。

⇒少人数でずっと同じ集団で生活してきているので、お互いのことをよく知っているから質問が出やすいんですね。

- ・ちょっとよその学校、例えば公立学校なんかとは全然違いますからやっぱりそこが濃密だと思います。だからコミュニティを育てていくというようなところで、やはり大分そのスタート時点で違っているという感じがしますね。そこが大きいと思います。その資産を上手く活用しておられるのでそれをより上手く掴んでいけるといいかなと思います。我々大学でも1年生の春に議論をさせるためのワークショップをやったり、それから質問を導き出すためにそういうタイムテーブルを組んだりしないとなかなか出来ないの、そういう意味でいうと今日の雰囲気なんかを見ているとやはり小規模クラスで気心知れた

連中が集まっているという事の羨ましさを感じましたね。面白かったです。

(5) 学校長挨拶 閉会